『東亜同文書院大旅行誌』の食の記述にみる近代日本青年のアジア観

――台湾の例――

The Asian Look of Modern Japanese Youth Who Sees in Description of Food in the Toa Dobun Shoin, or Great Journey Journal: A Taiwanese Example

須 川 妙 子

SUGAWA Taeko

愛知大学短期大学部

Aichi University Junior College

E-mail: sugawa@vega.aichi-u.ac.jp

Abstract

The sentiments of students on a journey have been written in the Toa Dobun Shoin, or Great Journey Journal, a detailed record of extensive exploratory travel in East Asia same script note graduate student. It is possible to read out sentiments about sites and nostalgia about the mother country from overseas, as well as other things, from the description of food in particular. Because we went every place in Asia that had been under Japanese colonial rule, the students noticed that I felt different sentiments about Chinese inland areas and enjoyed the life and culture that my heart was attracted by in "colony Asia." Taiwan, which was under the Japanese government is mainly examined in this report.

The students in Taiwan maintained the stability of their minds and bodies through seeing Japan in Taiwan. They were brilliant on a severe journey to an inland area and healed slavery during the inland area journey. I located something that resembled how a Japanese hot spring town looked in a restaurant, visited graduate students at an intellectual's residence and received a hearty welcome of Japanese food in a Japanese house at a hokutou, hot spring, where development is underway among a Japan colonist underground. Taipei was called a small Paris; the stylish sentence haikara experienced in Japan in the growing season was also enjoyed. The combination of Japanese and Western culture, which is an aspect of culture in modern Japan, was seized upon with a place where the culture of local origin is not directly

regarded by the state but can be enjoyed fully in Taiwan, and culture is enjoyed in the ruler's bed.

Ⅰ．はじめに

東亜同文書院生の大調査旅行の記録である『東亜同文書院大旅行誌』には、行程中の書院生の心情が縷々記述され、特に食に関する記述からは、現地に対する心情や外地における母国への郷愁等を読み取ることができる。植民地支配下にあったアジア各地においては中国内陸部とは異なる心情をもっていたことに着目し、書院生が「植民地アジア」の中で心惹かれた生活文化について探る。本報告では日本統治下にあった台湾を取り上げる。

Ⅱ．史料および方法

『東亜同文書院大旅行誌』（雄松堂出版オンデマンド）を史料とし、台湾を経由した行程が含まれる記録を分析対象とした。食に関する記述を抽出して、前後の行程や現地での待遇、当時の世情などと照らし合わせて東亜同文書院生の心情を導きだした。

さらに、2016年2月19〜23日の現地調査で得た見聞、資料を合わせて検討材料とした。

Ⅲ．書院生の食文化背景[1)]

書院生が大調査旅行を遂行するのは成人直後の時期であり、書院入学までの日本での生活が彼らの生活文化背景、食に対する概念を形成したと考える。書院生が如何なる生活文化背景をもって大調査旅行を遂行したのか、書院生が成人に至る時期までの日本における食文化の概要を比較資料で確認する。本分析の対象とした書院生のおおよその誕生期から入学までの期間にあたる1890年から1920年頃の日本の食文化の特徴は以下の4つの点である。

1．食料事情の安定

「主食の割合が（略）明治20年ごろには米がふえ、穀物全体の50％を越えるようになった。（略）政府は米の生産を調整（略）米価は比較的安定」（昭和女子大学食物学研究室編 1971年 p. 145）との記録にあるように、米の供給が安定し消費が増大した時期である。

また、砂糖をはじめ食料の輸入も盛んになり食料事情が安定且つ消費が増大した。

1）下川・家庭総合研究会編 2000年を参考に検討した結果である。抽出した各年代の食関係事項の詳細は、須川 2014年に表掲載しているので参照されたい。

２．食への関心の高まり

「牛乳は病人と乳児のもの」（昭和女子大学食物学研究室編 1971年 p. 94）などといった栄養概念が広がり、衛生観念が根づいて公的機関による食品検査が始まるのもこの時期である。

また、新聞・雑誌での料理記事の掲載がはじまり、料理講習会が広く行なわれて男子対象の料理講習会も始まっている。

清浄な環境で、適切な食料を摂取することの重要性に気づき、また、見慣れない食材の調理方法を積極的に学ぶ姿勢が家政を担う女子に限らず男子にもみられる。

３．嗜好品摂取の日常化

食生活の洋風化に伴い、西洋的な嗜好品である氷菓・清涼飲料、生の果物、ビール・ワイン、コーヒー・紅茶、洋菓子が市場に出回り家庭での摂取も定着している。「アイスクリームがめっきりさかんになり、雑誌にも家庭での作り方が紹介され」（昭和女子大学食物 1971年 p. 97）との記録もあり、嗜好品が家庭で作れるまでに急速に普及している。西洋の生活文化、いわゆる「ハイカラ文化」を食生活においても積極的に取り入れ、食べることを「楽しむ」のが当時の食の風潮であったことがうかがえる。

４．食事の簡便化

和洋の飯屋、甘味屋・喫茶店での外食習慣が広がり、その影響を受けたパン食などの簡易な食事様式、駅弁や食堂車が登場し移動中の食事が容易になった。出先での食事の懸念なく外出できることは人の活動範囲を広げ、また外食を楽しむことが外出の目的ともなっていく。

Ⅳ．書院生の台湾認識

書院生の台湾についての認識を、台湾の地を踏んだ際の第一声の記述から探る。特徴的なのは、「母国の地を踏んだ」（10期生・1912年）「吾日本の地だ」（14期生・1916年）「唯日本であるといふ此単なる事実」（15期生・1917年）「台湾は何と云ふても日本の地である」（21期生・1923年）「懐かしの故郷へ」（25期生・1928年）など、「母国」「日本」「故郷」といった言葉が頻出することである。

これらの表現から読み取れるのは、「台湾は日本の一部」としての認識である。台湾へ向かうとは、書院のある中国上海から「日本へ帰る」ことを意味していた。大旅行のルー

トに台湾を組み込むことはやむをえずの選択結果であった場合[2)]もあるが、積極的な選択であれば、拙稿[3)]で分析したように大調査旅行を安全に確実に遂行できる条件のひとつとして「心身の安定を望める地」を組み込むことが重要であった。その意味では「日本である台湾」をルートに組み込むことは過酷な行程の前後に心身を癒すための「里帰り」であったとみることができる。故郷へ帰る時の心の高揚は、前項で述べた生育期の食環境を思い起こさせ、到着時に口にしたい食を想い描いたであろうことは想像に難くない。

Ⅴ．入台時の印象と食行動

「日本へ帰る」という心持の書院生の台湾の第一印象と食行動はいかなるものであったのか。

街の様子に関しては、「奇妙な所なりの一句に盡く。内地とは様子全く異なれど矢張親しみやすく」（17期生・1919年）とあり、日本とは異なる「奇妙な」様相だが何か親しみやすい印象をもっており、その違和感は、「整然とアスファルトの美観、廣い立派な道路と一定のル子ツサンス様式と心もちのよい建築、東京にも求め得られない」（15期生・1917年）「小巴里と言ふのを、惜しまない」（20期生・1922年）と説明されている。

これらの記述から読み取れるのは、生育期の日本が近代化すなわち西洋化していく姿を台湾に見出し、日本と西洋の折衷した姿を目の当たりにした書院生の、「説明のしきれない不思議な印象」であろう。しかし、書院生の大方は地方出身者[4)]であり、西洋化していく日本を生活の中で実際に充分に体験してきたとは言い難い。故に「夢にも憧れてをつた台北」（14期生・1916年）なのである。実体験の日本とは異なる景観であるが、伝聞として知っている近代化していく「都会の」日本、知識として頭の中にある西洋文化を混ぜあわせた「想像の中の近代日本の姿」をみることができたという歓喜を読み取ることができる。

そして、その感慨を胸に「夜台銀諸先輩のビールの饗応にあづかる」（17期生・1919年）のである。大半の台湾ルートの上陸港である基隆[5)]ではこの「ビール」を飲酒した記述が頻出する。まるで、水代わりともいえるほど、先輩訪問時はもとより、買物のついでに、買物から戻った際に、談笑の際に栓を抜く。これほど気軽にビールを飲める環境に身を置

2）詳細は岩田 2015年 b. p. 67を参照されたい。
3）「『大旅行誌』の食記述にみる書院生の心情変化――「雲南ルート」選択の意義を探る」（本稿入稿時には当論説は未発表であるが、2017年に出版予定の『書院生、アジアを行く――東亜同文書院生が見た20世紀前半のアジア』（あるむ）に収録予定である）。
4）詳細は大学史編集委員会（編）1982年を参照されたい。
5） 岩田 2014年 p. 59

いていることは、近代日本の都会の男子学生の姿[6]そのものである。台湾という日本に帰って、都会的な日本の学生の振舞いに興じたということか。

基隆の現地調査では食料品店の雑然とした雰囲気に現地の文化を感じる一方で、書院生が記した「整然と」「廣い」「立派な」道路には現在の意識では少々古びた観が否めないが、当時の「近代都市」のイメージを感じ取ることはできた。

露店や簡素な食堂がそこここに点在している様子からは、書院生が気軽にビールを入手できたことに納得した次第である。露店で売る汁麺にセロリが散らされていたという現地の食と西洋野菜という妙な組み合わせに、書院生が感じた和洋の「折衷感」をささやかながら感じた。

Ⅵ. 台湾での生活行動

台湾での書院生の調査活動は、製糖工場の見学やパイナップル等の畑作地の訪問、蕃社の訪問等であったが、これらの調査活動は魅力的な観光[7]となっていた。この点からも書院生は里帰り中の小旅行の心情にあって、台湾を重要な調査対象の地としてはみていないことが読み取れる。したがって、調査よりも、現地での生活を楽しんでいた傾向がうかがえる。

その生活行動には 2 つの志向がみえる。「伝統的な日本」と「西洋文化」の両方を求めている姿である。「伝統的な日本」を求めての行動としては、日本人の文化人が居を構える地域（永康街、青田街）へ出向いて日本家屋が建ち並ぶ街並を散策し、その地区に住まいする先輩宅を訪問していることがあげられる。「日本の家を見て誠に懐かしい親しみを感ずる」（21期生・1923年）のである。個人宅訪問時の接待の様子の詳細記述は見あたらないが、拙稿[8]での分析においては、先輩方の接待は大旅行中に日本を恋しく想う書院生の心情を汲んだものとなっていたこと、すなわち、「純日本的なもてなしをしていた」という点を勘案すれば、台湾においても同様の接待を受けていたであろう。

さらに伝統的な日本を求めての行動は北投温泉へ行くことであった。北投温泉は「全く別天地だ」（22期生・1925年）と記されており、ここで「先づ汗と煤煙で真黒になつた身体を温泉に浸して台湾の汗を流した」（22期生・1925年）。そして「とりたての鮎に舌鼓を打ち、ビールの酔によい気分になつて」（20期生・1922年）「浴衣姿でビールの栓を抜き、興につれて唱ひ踊る」（22期生・1925年）のである。

6）下川耿史・家庭総合研究会（編）2000年、昭和女子大学食物学研究室編 1971年など。
7）岩田 2014年 p. 61
8）注 3）と同じ。

このような伝統的な日本を求めての行動の記録には食行動の記述が比較的少ないが、もう一方の志向である「西洋文化」を求める行動には食行動の記述が頻出する。「氷屋が鈴を鳴らしつつ横町からでてきた「アイスクリーム」」（10期生・1912年）「ウヰスキーに文明の美酒を初めて味ふ」（16期生・1918年）「感じのよい英國人ばかり、葡萄酒に舌鼓を打ちながら話した」（25期生・1928年）と、西洋の嗜好品への関心の高さがうかがえる。そして、その嗜好品を楽しみながら、「ミッションスクールらしい女学生が美しい」（22期生・1925年）と青年らしい感想も記す。

このように、書院生の台湾で行動は台湾の伝統的生活文化を体験する事ではなかった。あくまでも「近代化する日本」を「日本としての台湾」で体験しているのである。その体験は生育期の書院生が「日本では体験できなかった日本」なのである。

しかし、台湾は大旅行ルートの一部、通過地であり、大旅行の本番ともいえる大陸内部へ向かうための準備地でもあった。「マーケットで自炊用の道具や食料品を仕入れ」（25期生・1928年）ることも必要であった。「いささかの緊張せざるを得ない」（22期生・1925年）心持ちで「中国としての台湾」も体験している。市場での体験については記述がないが、台湾を出る船中での記述には「人相の悪い支那人」（22期生・1925年）「豚小屋同然」（22期生・1925年）などがみられ、現地人との接触では恐怖や不安も感じ、現地の生活文化には必ずしも好印象を持っていなかったことがうかがい知れる。

このような書院生の記述を踏まえたうえで、台北で書院生が食料と薬を調達したであろう市場を現地調査した。現地で入手した「大日本職業別明細図・臺北市（昭和 3 年）」と現在の店舗配置を照らしあわせてみると、消失などによる店舗配置の詳細は変化しているが、業種ごとの地域内の区分けは当時と同様であった。書院生が「西洋」を体験した地域（現在の中心地と同地区と考えれば、総統府のある辺りか）から外れていき、「迪化街」「永楽市場」へ向かっていくと場末の風情が漂い、現地の生活者の素の姿を目の当たりにできた。薬屋、生鮮品店、衣類店、食堂が立ち並ぶ中で、これからの行程での必要物資を調達していく書院生の不安と、過酷な行程へ向かう意識の高揚を想像することは難くない。

Ⅶ. まとめ

書院生の台湾での行動は台湾の伝統的生活文化を体験する事ではなかった。あくまでも「近代化する日本」を「日本としての台湾」で体験しているのである。その体験は生育期の書院生が「日本では体験できなかった日本」すなわち都会の青年達が楽しんでいたいわゆる和洋折衷の「ハイカラ文化」なのである。おそらく西洋文化の直接体験をもたないであろう彼等は大旅行の中で「アジアを通した西洋文化」を享受しながら、中国を知ることが本意である大旅行を通して、西洋への関心と知識を得ていたといえる。

本稿で取り上げた台湾で書院生が体験したのは、日本統治によって流入した「和洋」折衷の西洋文化であったが、日本を通さない「アジアと西洋」の折衷文化を、書院生がいかにとらえていたのかについて、香港ルート、ベトナムルートを対象に今後分析していきたい。

本研究は科研費（基盤研究 (C)15K01896）における共同研究であり、本稿はその一部の報告である。

参考文献

岩田晋典　2014年　「大旅行調査と台湾：その位置づけをめぐって」『同文書院記念報』Vol. 23別冊①　pp. 57–61
――――　2015年 a.　「東亜同文書院大旅行調査と植民地台湾：書院生が経験した『日本』」『文明21』No. 34　pp. 61–76
――――　2015年 b.　「東亜同文書院大旅行調査における台湾訪問ルート」『文明21』No. 35　pp. 87–97
片倉佳史　2009年　『台湾に生きている「日本」』祥伝社
――――　2015年　『古写真が語る台湾日本統治時代の50年　1895–1945』祥伝社
栗原純・鍾淑敏（監修・解説）　2014年　『台湾の旅／台湾旅行の栞／趣味の台湾』近代台湾都市案内集成第11巻　ゆまに書房
黄微芬　2015年　『甜蜜蜜至臺南伐甜頭』文化部文化資産局・臺南市政府文化局
下川耿史・家庭総合研究会（編）　2000年　『明治・大正家庭史年表』河出書房新社
昭和女子大学食物学研究室（編）　1971年　『近代日本食物史』近代文化研究所
須川妙子　2014年　「『大旅行誌』の食に関する記載にみる書院生の心情」『同文書院記念報』Vol. 23別冊①　pp. 63–77
大学史編集委員会（編）　1982年　『東亜同文書院大学史―創立八十周年記念誌―』社団法人滬友会
高木秀和　2008年　「書院生は上海で肴を食べていたか―各期回想録にみる書院生の食事情―」『愛知大学東亜同文書院大学記念センター・ニュースレター研究報』Vol. 4
――――　2009年　「魚を食べていた東亜同文書院40期台生の食事情―倉田俊介氏より頂いたお手紙を中心に―」『愛知大学東亜同文書院大学記念センター・ニュースレター研究報』Vol. 5
東亜同文書院（編）　2006年『東亜同文書院大旅行誌』シリーズ（雄松堂オンデマンド）
中林広一　2012年　『中国日常食史の研究』汲古書院
西澤治彦　2005年　「食事文化史からみた中国の南北」『武蔵大学人文学会雑誌』第36巻 4 号　pp. 95–119
藤田佳久（編）　1994年　『中国との出会い』東亜同文書院・中国調査旅行記録　第一巻　大明堂
――――　1998年　『中国を越えて』東亜同文書院・中国調査旅行記録　第三巻　大明堂
――――　2002年　『中国を記録する』東亜同文書院・中国調査旅行記録　第四巻　大明堂
――――　2011年　『東亜同文書院生が記録した近代中国の歴史像』ナカニシヤ出版
季増民　2008年　『中国地理概論』ナカニシヤ出版
楊環靜　2009年　『走進台彎光陰的故事：誉村菜市場』太雅生活館出版社